日本統治時代朝鮮の教育者崔容信（チェヨンシン）と神戸女子神学校

Choi Yongshin, an Educator in Korea under Japanese Rule, and Kobe Woman's Evangelistic School
일제 시대 조선의 교육자 최용신와 고베 여자 신학교

原　　真　和*

要　約

崔容信（1909-1935）は、日本統治時代朝鮮の教育者で、農村啓蒙運動に献身し、25歳で夭逝した。容信は、小説『常緑樹』のモデルとなり、社会奉仕や民族独立を象徴する存在となって、崔容信記念館が設立された。韓国では彼女に関する書籍や論文が少なからずあるが、日本ではほとんど知られていない。容信は、死の前年、神戸女子神学校に在学した。本研究は、崔容信に関する基本的な情報と資料を日本語で提供するものである。

キーワード：崔容信、日本統治時代朝鮮の農村啓蒙運動、神戸女子神学校

謝辞

私の安山市崔容信記念館[1]訪問を可能にしてくださった安山市「銀色巣」[2]の羅永秀（ラヨンス）（라영수）氏と「銀色巣」、安山市、安山市崔容信記念館の関係者諸氏、ならびに韓国語の資料の日本語への翻訳を助けてくださった小山美年子氏[3]に謝意を表します。

はじめに

崔容信（チェヨンシン）（최용신，1909-1935）は、日本統治時代朝鮮の教育者で、農村啓蒙運動に献身したが、25歳の若さで病死した。当時、農村であった泉谷（セムゴル）（샘골）で、地域の人々の教育に命を燃やした。彼女が死去した1935年の内に、彼女をモデルとした沈熏（シムフン）[4]（심훈，1901-1936）の小説『常緑樹（サンノクス）』が刊行され、さらに1939年には、柳達永（ユタリョン）（유달영）[5]による伝記『崔容信小伝』が刊行された[6]。独立後、1961年と1978年には、小説『常緑樹』の映画が公開された。彼女は、社会奉仕や民族独立を象徴する存在となった。かつて農村であった泉谷は、韓国（大韓民国）の安山（アンサン）（안산）市という近代都市となり、安山市は、2007年に、崔容信記念館を設立し、崔容信の生涯の記録を保存して、後世に伝えるとともに、彼女の精神を広く市民に知らせるための活動を行っている。柳達永によれば、崔容信は、「愛国者であり、不憫な子どもたちの師匠であり、伝道者であり、農村啓蒙のかがり火として同胞のために殉死した女性」であった[7]。

崔容信は、その死の前年、1934年の春学期に、神戸女子神学校社会事業科で学んだ。神戸女子神学校

* Masakazu HARA　聖和短期大学　教授

1）大韓民国京畿道安山市常緑区本五三洞879-4。http://choiyongsin.iansan.net/Main.jsp
2）大韓民国京畿道安山市常緑区本五洞713。「銀色巣」は、民間高齢者団体で、韓国語の表記は「은빛둥지」。http://www.4u2.co.kr/2010/main/main.php
3）元兵庫県立伊川谷高等学校教諭、茶房 Monto 店主。西宮市門戸荘18-68メゾン西宮101。
4）1919年、三・一運動に参加、4か月の獄中生活。1921年より中国杭州の浙江大学で劇文学を専攻、1923年、帰国、1924年、東亜日報入社。1926年、東亜日報退社、1927年、京都日活撮影所で映画製作に関する研究。1928年より朝鮮日報勤務。沈熏は、『常緑樹』執筆以前に、1929年の光州学生事件で中心的な役割をはたした男女の学生を主人公とする『永遠の微笑』を書いている。『常緑樹』は、韓国文学史上重要な小説で、文学全集等に収められているだけでなく、数種類の文庫本が出版されている。沈熏（梶村秀樹、現代語学塾常緑樹の会　訳）『常緑樹（サンノクス）』（龍溪書舎、1981年）、沈載英氏（沈熏の甥）による序文、2～3ページ、および同書、梶村秀樹氏による解説、357～358ページ。
5）柳達永は、「류달영」と表記される場合もある。
6）初版は、私が調べた限り、日本国内の図書館にはない。本研究では、九州大学所蔵の유달영，『최 용신 양의 생애 ―농촌 계몽의 선구―』（새글집，1961）を使用した。
7）유달영，『최 용신 양의 생애 ―농촌 계몽의 선구―』（1961）、126ページ。

は、1932年に、神戸から西宮に移転した。彼女が在学したのは、西宮の神戸女子神学校であった。彼女が朝鮮に帰った後、1941年に、神戸女子神学校は、ランバス女学院と合同し、聖和女子学院となり、その後、聖和大学となった。崔容信が在学した当時の神戸女子神学校の校地は、2009年４月以降は、関西学院西宮聖和キャンパスの一部となっている[8)]。崔容信が学んだ教室やチャペルがある当時の校舎と宣教師館は現存する。また、彼女が在学し、学生として生活したことを示す資料も、多くはないが、現在、聖和短期大学の管理下にある[9)]。

彼女の生涯に関する資料は、そもそも、それほど多くは現存していない。例えば、前掲の柳達永『崔容信小伝』は、1939年８月に初版が刊行され、翌年春には第３版まで印刷されたが、1942年には著者が逮捕、投獄され、『崔容信小伝』も不穏書籍として全国的に押収、焼却された[10)]。さらに、柳達永は、次のようにも記している。

> 崔さんが世を去った後に、彼女の日記帳などはすべて焼いてしまった。世の中が日毎に険悪になっていくので、彼女の心情の隠すところのない記録が思いもよらない弊害を様々な人に及ぼすのではないかと恐れて、そのようにしたのだった。重要ではない手紙や日記が突然捜索する警察の手に渡り、思いもよらず投獄され、辛苦を受けた人は無数にいるのだ[11)]。

そのような事情なので、彼女に関する現存する資料は、非常に貴重である。

『상록수 농촌사랑（常緑樹　農村愛）』（기독교문사，1991）の著者である洪錫昌（ホンソクチャン）（홍석창）氏は、聖和大学（当時）に来訪、調査し、その時に得られた資料がこの書籍で紹介されている[12)]。崔容信に関する書籍や論文は、韓国には少なからずある。崔容信を知る人は、韓国では少なくないが、日本では非常に少ない。彼女に関する書籍や論文の大部分は韓国語によるもので、日本語のものはほとんどないのが実状である。韓国語によるものでさえ、日本国内には少ない。

上記の事情を踏まえて、本研究は、崔容信の簡潔な紹介となる情報や資料を日本語で提供するとともに、現在、聖和短期大学の管理下にある崔容信に関する資料の内、確認できているものを記録しておくことを目的とする。

崔容信（チェヨンシン）（최용신，1909-1935）[13)]

8）神戸女子神学校は隣接する神戸女学院と同じ会衆派（アメリカン・ボード）、ランバス女学院はメソジスト派（南メソヂスト監督教会）、聖和すなわち「聖なる和合」は２つの教派の合同を意味した。関西学院はメソジスト派（南メソヂスト監督教会）に起源をもつ。崔容信自身はメソジスト派のキリスト者だった。なお、聖和短期大学は、現在、学校法人関西学院の学校の一つである。『関西学院事典　改訂増補版』（オンライン版）、「学校法人聖和大学」の項目参照。https://www.kwansei.ac.jp/r_history/r_history_008696.html

9）詳細に言えば、聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センターの管理下にある。以下同様。

10）유달영，『최 용신 양의 생애 －농촌 계몽의 선구―』（1961）、４ページ。
1961年版の著者による序文によると、1961年版は、部分的な添削はあるが、概ね1940年の第3版と同内容である。1942年、柳達永は、金教臣（김교신）、咸錫憲（함석헌）、宋斗用（송두용）らとともに、西大門（서대문）刑務所に投獄された。

11）유달영，『최 용신 양의 생애 －농촌 계몽의 선구―』（1961）、126ページ。

12）洪錫昌氏はメソジスト教会牧師。홍석창，『상록수 농촌사랑』（기독교문사，1991）、４ページに神戸女子神学校の校舎の写真と崔容信が参加した近江サナトリウム訪問時の写真が、21ページに神戸女子神学校自治会伝道部が開催した新入生感話発表会の記録の崔容信に関する部分の写真が紹介されている。ただし、４ページの神戸女子神学校校舎の写真は、1932年に西宮に移転する前の神戸時代のもので、崔容信が在学した西宮の校舎の写真ではない。なお、この書籍は聖和短期大学の管理下にある。この書籍は、また、竹中正夫『ゆくてはるかに―神戸女子神学校物語』（教文館、2000年）、370ページで紹介されているが、著者の漢字表記に誤りがある。

13）서병욱，『어리석은 선구자 최용신』（안산시，2010）より。

Ⅰ．崔容信の生涯と韓国における評価の概観

まず、서병욱,『어리석은 선구자 최용신』, 안산시, 2010（ソ・ピョンウク『愚かな先駆者崔容信』安山市、2010年）、299ページ～301ページの「崔容信年譜」に基づいて、崔容信の生涯と韓国における評価を概観しておきたい。

1909.8.12.　咸鏡南道徳源郡縣面斗南里（現在は北朝鮮領内）で、慶州崔氏昌熙を父として、２男３女（姉용순、長兄時豊、次兄時恒、妹容璟）の内の次女として生まれる。

1918.3.20.　斗南里の私立斗南学校に入学。この頃、斗南里監理（メソジスト）教会日曜学校に通う。

1920.　よりよい教育を受けるために、元山（現在は北朝鮮領内）の樓氏女子普通学校に転校。

1924.4.　樓氏女子普通学校を卒業後、同じキリスト教監理教会系列である樓氏女子高等普通学校に入学。

1925.　同じ村の斗南教会学生会会長金學俊（김학준）と婚約。

1928.3.　樓氏女子高等普通学校を首席で卒業。朝鮮日報に「校門から農村へ」と題する文章を発表[14]。

1929.3.　樓氏女子高等普通学校チャプレン全義均の薦めで京城（現ソウル）の監理教会協成女子神学校本科に入学。

1929.　朝鮮男女学生キリスト教青年会夏令会準備および会長協議会に監理教会協成女子神学校代表で参加。夏期休暇時、黄エスター教授の指導で農村実習を学友金路得[15]とともに黄海道遂安郡川谷面용현里（現在は北朝鮮領内）で行う。ミラー女性伝道師が京畿道水原郡半月面泉谷教会に講習所を開設。

1930.6.　江原道通川郡浦項邑玉馬洞で第２次農村実習。

1931.4.　３年生のとき、校内籠城のリーダーと目されて懲戒を受け、学業中断。

1931.10.10.　YWCA の指示に従って、京畿道水原郡半月面泉谷講習所の教師兼農村指導者となる。

1932.5.　泉谷[16]学院設立認可。

1932.10.　学院新築のため秋夕祭を開催。泉谷学術学院建築発起会を組織（会長：廉錫柱）。屯垈里の有志朴容德が敷地1530坪を寄贈。

1932.10.27.　泉谷学院定礎式。

1933.1.15.　泉谷学院落成式。23坪規模。日帝が学院定員を60名に縮小。

1933.10.　YWCA が泉谷学院への補助金を半減。

1934.4.[17]　神戸女子神学校社会事業科に入学。

1934.7.20.[18]　神戸女子神学校校内誌『青空』に「私の所感」を寄稿。

1934.9.　脚気悪化のため朝鮮に戻る。泉谷で活動を再開。

1934.10.　女性雑誌『女論』に「農村の哀訴」を発表。

1935.1.　腸重畳症[19]のため水原道立医院に入院。２度の手術を受ける。

1935.1.23.　午前０時20分死去。25年５か月余の生涯。

1935.1.25.　葬儀委員会を構成（委員長：廉錫柱）。葬式は午後２時、社会葬として挙行。遺言どおり、泉谷学院と教会が見えるところに埋葬。

1935.1.27.　朝鮮中央日報が「水原郡下の先覚者、無産児童の慈母、23歳（誤記）で崔

14）文章末尾の日付は1928年３月５日。안산시 최용신기념관,『내 몸뚱이는 샘골과 조선을 위한 것이다』, 재판 2012, 26ページ～27ページによると、掲載されたのは『朝鮮日報』1928年4月1日夕刊。
15）崔容信の死後、1938年春学期に神戸女子神学校で学んだ。竹中正夫『ゆくてはるかに—神戸女子神学校物語』（2000年）、340ページの写真で中央に写っているチマ・チョゴリ姿の眼鏡の女性は、洪錫昌氏によると金路得である。
16）泉谷は샘골または천곡と読まれるが、同一の村。現在は韓国の安山市となっている。
17）３月を４月に訂正。竹中正夫『ゆくてはるかに—神戸女子神学校物語』（2000年）、368ページ。
18）４月を７月に訂正。神戸女子神学校自治会文芸部『青空（あをぞら）』（1934年）の原文による。
19）『広辞苑』（第６版）によると、腸重積症の別称。유달영,『최 용신 양의 생애 —농촌 계몽의 선구—』（1961）、106ページには、化膿腹膜炎とある。

容信嬢逝去、事業に生きた女性」という見出しで報道。

1935.　東亜日報発行雑誌『新家庭』（5月号）が「永遠不滅の明珠故崔容信嬢が歩んできた業績の道」という記事を掲載。

1935.6.　崔容信をモデルにした沈熏（シムフン）の小説『常緑樹』が東亜日報創刊15周年記念懸賞長編小説に当選。

1939.8.　柳達永（ユタリョン）『崔容信小伝』（聖書朝鮮社）刊行。

1951.　泉谷学院が朝鮮戦争中の爆撃によって破壊される。

1960.　泉谷高等農民学院開院。

1964.　韓国女性団体協議会が容信奉仕賞を制定。

1976.　泉谷学院は、樓氏同窓会からの寄付金によって教室2棟を増築し、樓氏常緑会館に改称。

1978.7.18.　ハマナス幼稚園（現セマウル乳児園）開園。

1990.　安山市が崔容信奉仕賞を制定。

1991.11.　崔容信の墓が京畿道安山市郷土遺跡第18号に指定される。

1995.8.15.　国家独立有功者として建国勲章愛族章追叙を受ける。

1999.　崔容信先生遺物展示室開館。

2000.　社団法人崔容信先生記念事業会発足。

2007.11.20.　崔容信記念館開館。

Ⅱ．記録に遺る崔容信の言葉

前の引用のとおり、崔容信の日記帳などは、彼女の死後、焼却された。今日まで遺されている彼女自身の文章は、多くはない。その中から、「校門から農村へ」、「夜明けの祈り」、「私の所感」の3編を紹介する。

（1）「校門から農村へ」

崔容信は、1909年8月12日、咸鏡南道（ハムギョンナムド）徳源郡（トグォングン）縣面斗南里（ヒョンミョントゥナムリ）（現在は北朝鮮領内）で誕生した。1924年、樓氏女子高等普通学校に入学。1928年、満18歳のときに、同校卒業に当たって書いた文章「校門から農村へ」が『朝鮮日報』に掲載された。下の引用は、유달영,『최 용신 양의 생애 —농촌 계몽의 선구—』（1961）、29ページ～31ページからの日本語訳である。

「校門から農村へ」

あと数日で中等教育（女学校）を終えることになる。喜びもあるが、反面、寂しさも感じる。縁の深い、思いのこもった樓氏（ルシ）の丘を去るにあたり、状況や立場がほぼ同じ私たちは、新たな希望や抱負をいだいている。今、私たちは、校門を去り、社会へと歩み出すこととなった。私たちの目前の道が平坦だとは到底考えられない。この社会には、足りない点や欠陥のあるところが多いからである。

この社会は何を要求し、また誰を求めているのか。社会は新しい教育を受けた新しい人材を必要としている。とくに、現代中等教育を受けて卒業する女性が最も必要とされていると思う。これは、女性が男性より優れているからではなく、朝鮮の過去を振り返ってみて言えることである。男性たちは多少の努力と活動をしてきたが、大きな成果を得られなかった。これは、男性たちの努力と活動が不足しているためだけではない。元来社会は男女両性で成り立っているのである。昔から私たち朝鮮の女性たちは、五千年の間、暗がりの中に閉じ込められ、社会の大勢はもちろんのこと、自分たちの個性さえ見失ってしまった。こう考えると、男女両性で成り立ったこの社会が男性だけの活動と努力だけでは十全な発展を期待しえないことが理解できるだろう。

ここで教育を受けた女性たちが自ら進んで自分たちの責任の持ち分を引き受けて奮闘することによって初めて完全な社会が建設されると信じる。中等教育を終えた私たちは、各々自分の理想に向かって各自の最善の努力をしなければならないだろう。

今、最初にやるべきことは、農村女性の指導だと信じる。私は農村で成長したために農村の現状を漠然とではあるが知っている。それゆえ、私が切実に感じることは、農村の発展も結局は女性の奮闘にかかっているということである。

今日、教育を受けた女性たちの中に、藁屑（わらくず）が積もった農村のために身をささげる人が滅多に

いないことは事実であり、大変残念なことである。旧い女性ばかりが暮らしている農村が、文化の目によって、暗がりから歩み出てくるようにできないのであれば、この社会は、いつまでも完全な発展を遂げることはできないだろう。農村女性の向上は私たちの責任であることを知らなければならないだろう。中等教育を受けた私たちが華やかな都市生活だけにあこがれ、安逸な生活だけを夢見ることこそが正しいのだろうか。農村に帰っていって、文盲退治に努力することこそが正しいのだろうか。重ねて言う。私たちは互いに手を握り、農村に行こう。(1928.3.5.)

(2)「夜明けの祈り」

前の引用にあるとおり、崔容信の死後、彼女の日記帳などは焼却された。しかし、柳達永は、崔容信の妹容璟が持っていた容信の学生時代のノートの中に、「夜が明けて鐘の音にさそわれてささげる祈祷」と題された文章を発見した。文章末尾の日付は、協成女子神学校に入学して間のない1929年4月2日となっている。下の引用は、유달영,『최 용신 양의 생애 —농촌 계몽의 선구—』(1961)、127ページ～128ページからの日本語訳である[20]。

「夜が明けて鐘の音にさそわれてささげる祈祷」

(前略)

全能であられる主の力でなくて、どうしてこの美しい夜明けがあり、神様の意志でなくて、どうして私がこの喜びの丘を見ているでしょうか。

神様は唯一であられ、全能であられます。

神様の恵みは無限であり、私は感謝するのみです。

主のみ名を永久に尊び、主のみ名を永遠に賛美します。

おお、神様がいらっしゃるこの丘で、神様が造られたこの夜明けに、この美しい自然の中で、主は私を喜びで満たしてくださり、歌わせてくださいます。主よ、あなたの恵みに感謝いたします。

父なる神様、この静かで清らかな夜明けのように、この心も清く静かにしてください。この朝の空気が新しいように、この精神も新しくしてください。父なる神様、聞こえてくる聖なる鐘の音のように、この体を強くして、この口から出てくる言葉がすべての人の精神を目覚めさせるようにしてください。

あの鐘の音は聖なる音です。そこにはどんな妬みや嘘もありません。

おお、主よ、この心の中からあらゆる不義なる考えを追い出してしまえるように助けてください。主よ、私があの鐘の音を聞くように、この罪人(つみびと)の祈りの声を聞いてください。

聖なる主よ、この体を主のためにささげます。

主よ、この体は他者のために、兄弟姉妹のために働きます。

主よ、生きるのも主のために、働くのも義のために、死ぬのも他者のために死ぬようにしてください。

主よ、この体を主にささげますので、この朝の空気が新鮮で清らかなように、私の心を新しくしてください。

おお、主よ、今日一日を喜びで満たしてください。

(後略)

(3)「私の所感」

この文章は、神戸女子神学校自治会文芸部の文集『青空』に掲載されている。この資料は、手書きの文字、青色インクの謄写版印刷によるもので、聖和短期大学の管理下にあるが、状態が非常に悪い。青色インクが消えかかっており、辛うじて判読できる程度の状態である。将来、判読できなくなる恐れがある。表紙には、「あをぞら」、「1934」という文字があり、並木らしき線画が描かれている。扉には、「昭和九年初夏　青空　神戸女子神學校自治会文藝部」の文字がある。

「私の所感」と題する文章は、その題の下に筆者名として、ただ「Y.S.」とだけ記されているが、この文集が1934年夏に発行されていることとその文章

20) 現代の日本語の祈りとして自然な表現に置き換えた部分がある。例えば、原文には「主」と「エホバ」が混在しているが、「エホバ」とある箇所は「主」に置き換えた。また、日本語訳で「兄弟姉妹」とした部分は、原文では単に「兄弟」と書かれている。

の内容から判断して、崔容信の日本語の読み Yoshin Sai を表していることは明らかである。使用言語は日本語、文字は活字ではなく手書きであるが、おそらく日本人の編集者の筆跡ではないかと思われる。なお、原文は句読点のない縦書きであるが、下の引用では句読点を補った。また、一部の漢字は現在普通に用いられる日本語の漢字の字体に置き換えた。

私の所感

Y. S.

玄界灘を渡つて下関についた時、どんなにうれしかつたでせう。その嬉しさは他に比べることの出来ない程でした。それは異境に行くといふ寂しさよりも親しい故郷に帰るやうな気持ちがしたからです。勿論私は今年初めて此の地に参りましたけれども、此の学校とはもはや私に深い関係のあるやうに思はれて常に此の学校を憧憬してをりましたから、その様に憧憬した此の学校を見ることが出来、又勉強することの出来ることが嬉しかつたのでございます。

いよいよ四月十日が来て学校の門をくぐり、其の日より諸先生の御親切や生徒の愛情に感激致しました。

一日一日学生々活を過す中に私は一人異邦人といふ寂しさもなく、喜と嬉しさが満ちてゐます。此の内には他の社会に見られないところのキリストイエスの愛が輝いてゐるからであります。此の世には何処へ行つても階級差別や民族差別や貧富差別で悲劇が起つてゐます。けれども此の学校内には此の様な階級民族貧富貴賤の思想を超越したキリストイエスの愛が輝いてゐるのに感歎せずにはゐられません。故に私は喜ぶのであり、又神に感謝するのであります。

しかしながら此のキリストの愛が広く伝播して、この地上に神の国が至ることを切に願ひます。個人に於いても家庭に於いても社会に於いてもキリストイエスの眞の愛を持たないならば本当の幸福はありません。いくら偉い人でもキリストの愛を持たない人は欠陥を有し、又いくら幸福な家庭であつても眞のキリストの愛のない家庭は何時か不幸を招き、いくら強力を持つた民族でもキリストの愛のない民族は滅びつつあるのであり、又如何なる文明社会でもキリストの愛のなき社会は腐敗しつつあり、又いくら国際平和を唱へてもキリストの愛のない平和は成立たないのであります。それ故此の学校内で修養しつつある私共は、此の本当のキリストイエスの愛を以て、個人の幸福の為に、社会安(寧)[21] の為に、世界平和の為に、至る所にイエスの愛を実現し、キリストの愛を輝して、神の国が此の宇宙に臨むことを願ふものでございます。

感じること多く、然し言葉が足りないのでございます。

七月二十日

春すぎて若葉静かになりにけり此の静けさの惜しからめやも

——中村憲吉——[22]

なお、서병욱,『어리석은 선구자 최용신』, 안산시, 2010, 189ページによると、この文章の内容は、前述の洪錫昌氏が収集し、コ・ヨンウ（고영우）氏が韓国語に翻訳し、その主要な部分が同書の188ページに掲載されている。

Ⅲ. 神戸女子神学校在学前後の事情

（1）渡日前の状況

泉谷学院は、女性伝道師ミラーが1929年に開設した泉谷教会講習所を起源とする。1931年10月、崔容信は、YWCA の指示によって、泉谷講習所の教師兼農村指導者となった。1932年５月、泉谷学院の設立が認可され、10月、定礎式が行われ、翌1933年１月には落成式が行われたが、日帝によって定員が60名に縮小された[23]。

21）原文には「社会安安の為に」とある。

22）末尾の中村憲吉の短歌の引用は、編集者によるものか崔容信によるものかは不明であるが、おそらくは編集者によるものではないだろうか。中村憲吉記念文芸館（広島県三次市布野町）のサイト（https://kenkichi.jimdo.com/）によると、中村憲吉はアララギ派の歌人で、この文集が発行される少し前の1934年５月５日に46歳で死去している。崔容信は1935年１月23日に死去している。この時点では、誰も崔容信の死を予期していないはずであるが、1934年の夏は崔容信にとって最後の夏となった。

23）前掲の서병욱,『어리석은 선구자 최용신』（2010）、299ページ～301ページ「崔容信年譜」より。

このことによって、約半数の子どもたちが学院を去らなければならなくなった。同年10月、定員の削減にともなって、YWCA から補助金半減の通知が来た。これらの出来事は村の人々に怒りと動揺をもたらした。さらに、それは崔容信への不信感や批判となって現れ、彼女を非常に苦しめた。その秋の運動会を契機に、村の人々の不信感や批判は一旦終息したように思われたが、容信は、自分の知識や能力が足りないと考えるようになった。

崔容信は、開拓によって農業国として成功したデンマークで学びたいと思ったが、具体化するために必要な情報を得るすべがなかった。他方、婚約者金學俊は、すでに日本に渡り、東京で学んでいた。それは、朝鮮で農村啓蒙に献身するための勉強であり、そのために結婚を延期していた二人であったが、彼からの連絡は途絶えていた。さらに、彼は信仰を失いかけているのではないかという噂が聞こえてきた。

このような状況下で、容信は日本に渡って学ぶ決心をした。彼女は、友人に泉谷のことを頼み、神戸女子神学校へと旅立った。1934年３月のことであった[24]。

（２）朝鮮に戻る前後の状況

来日後、婚約者金學俊とは連絡が取れ、彼の信仰もよみがえったが、彼は崔容信に結婚を迫ってきた。しかし、日本で結婚して泉谷に戻ることは、泉谷の人々の状況を考えると、できないと考えた容信は、結婚をもう少しだけ延期することを學俊に納得させた。

神戸女子神学校の崔容信のもとには泉谷の友人から手紙がもたらされた。泉谷学院の教師の仕事は、志のある人にしかできないものであったが、誰が来ても、村の人々は、容信との違いに不満を表すので、長くは続けられず、しばしば交代した。容信の不安と焦燥は増した。

日本に来て３か月ほどして、容信は脚気に悩まされるようになった。その頃、長兄時豊、妹容璟と日本で再会した[25]。

容信の脚気はますます重篤になり、来日半年となる９月、彼女は朝鮮に戻ることにした。故郷の元山で少しでも治療して、それから泉谷に戻ろうと考えたが、泉谷の人々からは、横になっていてよいから、すぐに戻ってきてほしいとのことであった。容信にも一日も早く泉谷に戻りたいという気持ちがあったので、神戸女子神学校を後にした容信は、泉谷に直行した。人々は歓喜に沸き返った。泉谷に帰還した当初、彼女は横になっていたが、それでも彼女の存在が人々を落ち着かせていった。容信は、両脚がまだひどく腫れて、引きずる状態であり、村人たちが静養を勧めたにもかかわらず、病状が少しでも快方に向かうと、以前と同様の活動を再開した[26]。

（３）日帝時代朝鮮の農村啓蒙運動

1870年ごろ、ロシアの学生たちは、「ヴ・ナロード（民衆の中へ）」という啓蒙運動を始めた。これに触発された朝鮮の学生たちは、農村啓蒙運動を起こし、1930年ごろ、運動は盛んになった。農学を学び、一定期間農村に入って啓蒙活動をしたり、農民となって生涯を農村啓蒙にささげようとする運動であった[27]。

1930年ごろの朝鮮の農村は、地主兼自作農が１割程度、自作農兼小作農が２割程度、残りの７割程度は純小作農であった。文盲が約８割、小学校就学率が約３割で、年中働いても１年の食糧がたくわえられる農家は２割程度だった。1940年ごろからは、米は全量強制供出となり、多くの農民は、雑穀、芋類、草根木皮を食べて命をつないだ[28]。

朝鮮は、1895年以降、日本の半植民地的な状態となり、1910年以降、日本に併合された。1945年の解放に至るまで、独立の回復は常に最大の課題であった。1919年、三・一独立運動が起こったが、鎮圧された。植民地化された朝鮮の経済は、工業化が抑えられ、日本製商品の市場化等、従属的な構造の下に置かれていたが、その問題は、とくに農民が全般的に食べられなくなるという現象として表面化した。

24）유달영,『최 용신 양의 생애 —농촌 계몽의 선구—』(1961)、79～85ページ。
25）崔容璟は、後日、泉谷で教師となった。姉容信が語った「イエス様は弟子たちの足を洗ってくださった」という言葉が容璟の胸中に深く刻まれた。유달영,『최 용신 양의 생애 —농촌 계몽의 선구—』(1961)、87～88ページ。
26）유달영,『최 용신 양의 생애 —농촌 계몽의 선구—』(1961)、85～89ページ。
27）沈熏（梶村秀樹、現代語学塾常緑樹の会 訳）『常緑樹（サンノクス）』（龍溪書舎、1981年）、沈載英氏による序文、２～３ページ。
28）同書、沈載英氏による序文、４～５ページ。

朝鮮の農民の多数は、小商品生産や土地所有から切り離され、食べることが困難となったが、都市に出て労働者となる道もふさがれていた。1920年代には、米の増産を命じられ、そこに1929年の世界恐慌が襲い、1930年には米価が暴落し、農民の飢餓、流浪、家族離散が頻発し、非常に悲惨な状態となった[29]。

このような状況下で、1920年代以降、様々な運動が展開されたが、キリスト教の青年会組織が行ったのは、識字教育から文化運動をとおして農民の自主的生活改善を目指す農村啓蒙運動であり、崔容信が関わったのは、この流れの運動であった。様々な運動の中には社会主義者が主導する組織が関わるものもあったが、梶村氏は、いずれも「農民の生活を不条理な収奪と破壊から守るとともに、農民自身がめざめ実力を持つことを通じて、協同の力で自主的発展の道を切り拓いていくための諸活動」であったと総括している。これらの運動は、1930年から31年にかけて、ピークに達した[30]。

これは、日本帝国主義にとっては大きな脅威であった。朝鮮総督府は、1932年以降、「農村振興運動」という官製の「運動」を作り出し、民衆のエネルギーをそこに吸収しようとした。崔容信が関わった農村啓蒙運動は、このような状況下で展開された[31]。

Ⅳ. 聖和短期大学の管理下にある崔容信に関する資料

最後に、現在、聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センターの管理下にあり、存在が確認できている資料を以下に記す。

・神戸女子神学校自治会文芸部『青空』1934年

崔容信「私の所感」を収録。筆者名は「Y.S.」と記されている。

・神戸女子神学校記録簿

女性宣教師による手書きの記録簿。24ページ、“1934 Spring”の欄に1年生の1人として“Sai”と記されている。

・近江サナトリウム見学参加者の集合写真

訪問者の写真の中に崔容信が写っている[32]。

・神戸女子神学校同窓会『会報』第22号（昭和10年7月）

26ページの「校内消息」に1934年6月27日～30日に行われた近江兄弟社見学を兼ねた伝道旅行の報告がある。これによると、上記の近江サナトリウム訪問時の写真は、1934年6月28日のものと考えられる。

・夏期講習会参加者の集合写真

現在4号館として現存している神戸女子神学校校舎の側面を背景に崔容信が写っている。

夏期講習会（1934年7月）。最後列、左から5番目の女性が崔容信。背景は現存する4号館の側面（5号館側）[33]。

・“Attendance at Inter-Bible School Institute, Nishinomiya, July 2-10, 1934”

上記夏期講習会の出席者名簿。タイプ打ちされた1枚の書類。英文。“Kobe Joshi Shingakko”の欄に“Sai Yoshin”の記載がある。この書類から、上記の写真が撮影された時期が分かる。

・神戸女子神学校自治会記録簿

手書きの記録簿。136～137ページに、1934年4月

29）同書、梶村秀樹氏による解説、358～360ページ。
30）同書、梶村秀樹氏による解説、360～361ページ。
31）沈熏『常緑樹』は、小説であり、フィクションの部分も当然あるが、『常緑樹』では、「振興会」の勢力との全面対決を避けながら、目的を見失うことなく、粘り強く運動を持続しようとする様子を描いている。同書、梶村秀樹氏による解説、362～363ページ。
32）竹中正夫『ゆくてはるかに－神戸女子神学校物語』（2000年）、369ページに掲載されている。
33）竹中正夫『ゆくてはるかに—神戸女子神学校物語』（2000年）、362ページに掲載されている。写真中に「1935.7.」との記入が確認できるが、これは誤記。

27日に行われた新入生感話発表会の記録があり、崔容信の感話の要約が記されている。

・神戸女子神学校の学校案内（写真中心のもの）
・神戸女子神学校の学校案内
（教員一覧とカリキュラム表を記載したもの）
・私立神戸女子神学校規則書（昭和８年度）
・神戸女子神学校社会事業科案内

上記の４資料は、正確な年月日の不明なものもあるが、いずれも西宮に移転後のもので、崔容信が在学した当時の神戸女子神学校の様子を知ることができる。

参考文献

유달영,『최 용신 양의 생애 ―농촌 계몽의 선구―』, 새글집, 1961.（柳達永『崔容信嬢の生涯　―農村啓蒙の先駆―』1961年）
沈熏（梶村秀樹、現代語学塾常緑樹の会　訳）『常緑樹（サンノクス）』龍溪書舎、1981年
梶村秀樹著作集刊行委員会・編集委員会編、『梶村秀樹著作集』第４巻、明石書店、1993年
竹中正夫『ゆくてはるかに―神戸女子神学校物語』教文館、2000年
서병욱,『어리석은 선구자 최용신』, 안산시, 2010.（ソ・ピョンウク『愚かな先駆者崔容信』安山市、2010年）
안산시 최용신 기념관,『내 몸뚱이는 샘골과 조선을 위한 것이다』, 재판 2012.（安山市崔容信記念館『私の体は泉谷と朝鮮のためのものだ』第２版、2012年）